

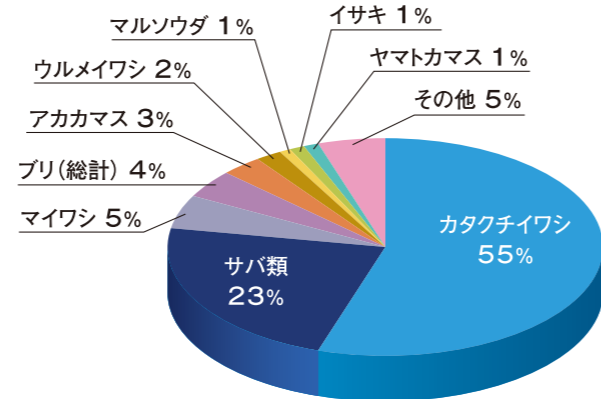
10・3 定置網漁の漁獲量に見る相模湾の生物相

相模湾沿岸には多くの定置網の漁場があります。これらの漁場の漁獲データは小田原市にある「神奈川県水産技術センター相模湾試験場」に集められています。定置網そのものの改良や方式の切り替えにより、経年変化を単純に比較することはできないのですが、定置網で捕獲されやすい魚種の種構成やその変化を知ることができ、自然環境の変化の一端を垣間見ることができます。

藤沢市が面している相模湾に生息する魚類の一例を漁獲量の統計からみてみました。グラフは、平成21年1月から12月の江の島漁場の魚種別漁獲量を示しています。

江の島の定置網漁場において最も多く捕獲されているのは、カタクチイワシで全体の55%、次いでサバ類の23%で、総漁獲量の約80%を占めています。このほか、マイワシ、ブリ(小さなものも含む総計)、アカカマス、ウルメイワシ、マルソウダ、イサキ、ヤマトカマスなどが代表的な魚種で、これらを合わせると総漁獲量の95%となります。

定置網で捕獲されにくいアジ類、タイ類、ヒラメ、カレイ、エビ・カニ類、イカ・タコ・貝類なども相模湾の生物相に加わります。



江の島周辺漁場における年間の定置網総漁獲量の内訳
(資料協力:神奈川県水産技術センター相模湾試験場)

コラム

相模湾を訪れるウミガメたち

(資料協力・文:新江ノ島水族館)

あまり知られていませんが、相模湾に面する藤沢市には、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、そしてオサガメの4種が来遊します。ウミガメは世界の海に7種いますが、そのうちの6種は、IUCN(国際自然保護連合)のレッドリストに掲載され、世界的に絶滅が危惧されています。特にタイマイとオサガメは個体数が少なく、絶滅のおそれが高いとされています。また、4種のうちでアカウミガメだけは、相模湾の砂浜でも産卵します。アカウミガメは1回に100個ほどの卵を産みます。

同じ母ガメが1年に2~3回産卵し、2~3年おきに産卵すると言われています。相模湾では1年間に多くて10件ほどの産卵が確認されています。最近では、平成24年に藤沢市の鵠沼海岸で産卵がありました。当館では旧江の島水族館のころから50年以上、地域住民の方から産卵の情報が入ると、近隣の博物館や行政と協力して、産卵巣の保全を行ってきました。

近年では、できるだけ産卵した砂浜で卵を保全することが推奨されていますので、当館でもそのようにしています。しかし、夏の産卵シーズンには海の家が建ち並び、多くの海水浴客でにぎわいます。道路や建物も砂浜に隣接しているため、産卵した砂浜で卵を保全できないことも多いのが現状です。また、相模湾では当館が把握している限り、毎年10個体以上のウミガメが海岸に漂着します。これはウミガメたちが、何らかの原因で死亡してしまっているということです。

相模湾にやってきたウミガメたちが何の心配もなく悠々と泳ぎ、餌を食べ、アカウミガメはたくさん産卵のために上陸し、ここから多くの子ガメたちが旅立つ。そんな海や砂浜を大切にしていきたいと思います。

コラム

観光地引き網の捕獲生物から
垣間見える変化

近年、地引き網で捕獲される魚たちにも変化が起きているようです。海流に乗って、南の海から相模湾にたどり着いたと思われる種の中に、ギンガメアジの幼魚など、かつてはあまり見かけなかった魚種が散見されます。これらの暖かい海に生息する魚種の多くは、たどり着いた先の冬を越すことが難しいはずですが、水温の高い河川などに侵入して生き残る割合が高まっているのかもしれない。

今回の調査期間中、境川河口で実施した陸水域調査でも、クロホシフエダイ、ギンガメアジ、ロウニンアジなどの幼魚や、ウシエビ(流通時の呼称:ブラックタイガー)など、暖かい海由来の生きものが確認されています。



相模湾内の砂浜で行われたアカウミガメ産卵巣の
孵化状況確認の様子:平成23年9月
(写真提供:新江ノ島水族館)



海へ向かうアカウミガメ
(写真右:個人提供)